緑爽会会報　No. 150

2017年6月26日発行
日本山岳会　緑爽会
発行人　富澤克禮

デザイン･制作　関塚貞亨

〜〜《報告》〜〜〜

６月例会　皆野アルプス「破風山」

６月例会は総会資料では２５日と予告されましたが、梅雨時となるので早めた方が良いと近藤さんから連絡があり、４月会報の予告欄にて１０日とお知らせしました。そのことで日にちを間違われた方がおられましたら申し訳ありません

コースタイム：皆野駅（9：20）→「山靴の道コース」登山口（9：50）→前原山（10：18〜30）→途中休憩（11：18〜30）→猿岩→東屋→破風山山頂（12：15〜13：05）→水潜寺（13：50〜14：20）→満願の湯（15：00〜50）バスにて皆野駅（16：33 発の電車に乗車）

６月１０日（土）
担当：近藤雅幸
左より：中村好至恵、大島洋子、近藤雅幸、富澤克禮　（写真：荒井正人）参加５名

中村　好至恵

移動時間の方が登山時間より長くなる秩父方面の山ですが、皆さんと一緒ならいい機会！と参加し楽しい一日となりました。梅雨入り後の当日は 30℃を越える‘猛暑’、けれど山の中は緑を渡る風が心地よく山頂からの景観もこの時期にしてはまずまず。コースは皆野駅から歩き出して南側から登る新？コース。地元の有志が整備しているらしいこのコースは「山靴の道」と名付けられ、そこここに手作りのかわいい山靴をあしらった道標が設えてありました。(右写真：中村好至恵)

さてこのコースの登り､実は３時間という意外に長丁場で､朝出発が早かった私は早々と２つめのピークの頃には‘お腹がグ〜’。そして細身の富澤さんもその内「ガソリン切れだよー」と途中で行動食を放り込みつつ、ちょっとした岩稜も

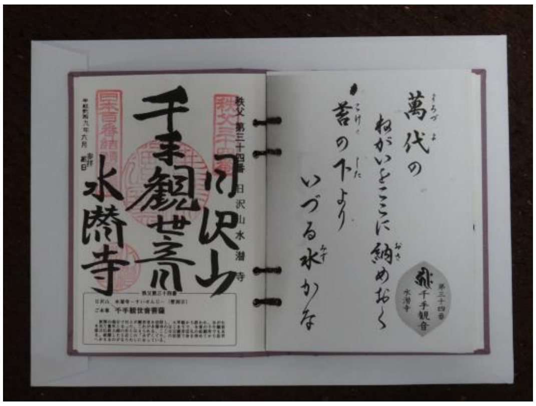
あるアップダウンの繰り返す尾根を頑張って行きます。と、ようやく北側からの「関東ふれあいの道」と合流。暫く行くと「猿岩」という岩峰があり、そこを過ぎると山頂直下の東屋です。20 人近くの人たちが休憩していましたが、そこからすぐの山頂までひと頑張りして「なるほど…」、山頂は狭く日差しを避ける所がありません。皆さんお昼はその東屋の涼しいところでとっていたのでした。

私たち 5 人は上手く小さな木陰などに陣取り、貸し切りで約 1 時間山頂でのひとときを山座同定などで楽しみました（中村はスケッチ時間を頂き北側の城峯山を描きました）。

下山は山頂から稜線を辿り、札立峠より沢沿いを行くコースです。ここは「秩父札所巡り」の‘巡礼道’となっていて、当日も白装束の方と出会いました。そして何を隠そう、富澤さんも秩父の札所巡礼をなさっていて、この日の下山口に控える「水潜寺 34 番札所」にて熱心にお参りされていました。御朱印や揮毫もして頂き、傍で見ていた私まで何やらありがたい気持ちになりました。

その後、バス時刻調べの手違いにて大島さんがそのまま歩いて皆野駅まで行かれることになりましたが、残り 4 人は待ち時間を利用して「満願の湯」と言う温泉にて汗を流して皆野駅へ。空いている車中の人となり、ボックス席にてミニ反省会をしつつ日の長い明かるい夕刻の列車に揺られての帰路となりました。

般若心経を唱える富澤代表（写真：中村好至惠）



水潜寺御朱印（写真：富澤克禮）

～～《寄稿/投稿》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

鳥海山麓からの便り

佐藤　淳志

少しずつ気温が上昇し、我が家の庭の「ギョウジャニンニク」も芽が出てきました。里山の「マンサク」も、いつもより早い開花です。

緑爽会の資料をお送り頂き、有り難うございます。武田久吉氏が鳥海山に来られたことは知っていましたが、興味ある資料を読み返しているところです。

私は相変わらずイヌワシの調査です。最近新しく取り組んでいる生息域の生物多様性と、餌狩場環境整備の「列状間伐」の取組など、山形大学の教授、生徒と一緒に進めています。

先日、大学院生の卒論発表会に招かれ聴いてきましたが、さすがに論文、数値化など素晴らしいものでした。ついこの間まで長靴を履いて、私の後ろから髪を振り乱し、汗びっしょりで来ていた女子大生は環境省の職員になり、今年の院生は東北環境緑化を業とする会社に就職、専門職で進むようです。

地元、八幡小学校でのイヌワシをメインにした自然環境保全の研修会も年に４日間（うち野外研修１日、イヌワシ観察)、５年間も続いています。(酒田市教育委員会定着）年度の終りには校内全体、父兄も交えて発表会があり、私には全員の感想文と感謝の手紙を届けてくれます。

他に、環境省猛禽類保護センターの年間行事での研修の講師？　として依頼を受けてお手伝い。（県外からの参加者が多く、たまに専門の方も参加交流で楽しいです)

去年から、国土交通省東北整備局（新庄河川事務所管内）の希少猛禽類調査検討委員を引き受けています。仕事は、最上川水系の治山ダムや護岸、橋梁工事などで行う環境アセスメント調査の手法、精査結果が正しく行われているかを検討する委員で、イヌワシ研究第一人者の油井正敏さん（鳥海山開発で検討委員を務めた岩手の方、例の７人メンバーの人）と私、専門員の今井正さんの３人で、名誉職みたいなものです。定期的な会議は年４回あります。

「楽天のイヌワシ森づくり」は、私の名前が表に出ないように調査協力しておりますが、３年を目処に終えるようです。私としては、普段調査している「鳥海山南麓生息イヌワシ」が楽天の調査対象なので少しは稼がせて頂きました。

山田会長、松本理事、澤井委員長と初めてお会いして、「鳥海山大規模開発阻止」問題を緊急動議で取り上げて頂いたのが 1990 年、三島での「自然保護全国集会」でした。以来多くの自然保護委員のメンバーの協力のもとに、1997 年にその開発を断念に導くことが出来たわけです。当時の検討委員会組織を「鳥海山ワシタカ研究会」として引継ぎ、イヌワシとしては画期的な人工巣棚造り、そこでの繁殖成功、巣立ちまで学術的価値のある調査データを重ねて 19 年になりました。体力的に限界を感じたとき、これを纏めてみたいと思っています。

編者注：佐藤淳志さんには平成１３年の１２月例会で「鳥海山のイヌワシと共に生きて」と題してご講演をいただいている。そこでは、文中最後にあるようなスキー場建設断念に至るまでの経緯が語られた。会報124号に詳しいので、改めて読み返されることをお勧めしたい。なお、文中「武田久吉が鳥海山に来られた」ことに触れられている資料とは、昨年10月に穴田雪江、平野紀子両会員による講演「武田久吉と歩いた尾瀬」の資料として、武田久吉が穴田さん宛に出状した葉書が含まれていたことによる。そこで鳥海山へ行く計画が綴られている。

スリランカ大周遊

横関　邦子

1 月 19 日から 28 日まで、日本は一年で一番寒いころに赤道に近いスリランカに避寒にとも思ったが、用意した着替えは、半そでのＴシャツもあれば、フリースの上着、雨よけのレインコートなどいろいろ。地図で見るとインドの東側にあり、北海道より少し小さめの島だが大周遊ともなると気候は訪問場所により様々で、持って行った衣類はすべて着用。

スリランカ（正式名はスリランカ民主社会主義共和国）はご存じのように、以前セイロンと呼ばれ、

紅茶の国。そして 70%の人が仏教を信仰する仏教の国。日本から贈られた消防自動車や高速道路、幼稚園の壁も日本の幼稚園と同じライオンや象さんの絵が描かれ、また中国から作ってもらった高速道路など、経済的にはまだまだ海外から支援を受けている開発途上の国。開発途上であるからこそ人間と動物、多くの生き物が共存し、人々の素朴さ、やさしさが残っている国でもあった。

スリランカの最高峰は中部州ヌワラ･エリヤ北方にそびえるピドゥルタラーガラ山 2524 m だが、今回私たちが訪れた山はスリランカの聖なる山と呼ばれているアダムスピーク。サンスクリット語では『スリー・パーダ』といい、聖なる足跡という意味。仏教徒は仏陀の足跡、ヒンドゥー教徒はシヴァ神の足跡、イスラーム教徒はアダムの足跡、キリスト教徒は聖トーマスの足跡と拝している。スリランカ中央部の北方の、標高 2238m の信仰の山である。宗派を超え大勢の人が頂上を目指し、日の出を拝もうと登っている。いろいろな宗教の人が相反するのではなく、信じるそれぞれの神を拝もうと、ほぼ登り始めから頂上まで約 1200m の標高差となる石の階段を頂上まで登っている。このあたりは日が沈むと寒く、夜明け前の頂上は、フリースや風よけの上着が必須の極寒である。

霧に霞むアダムスピーク

スリランカでは高地となるこの地区のヌワラ・エリヤ地域は、英国統治時代からの茶畑が美しい場所でもある。多湿の気候と、山の傾斜を利用し、山々の一面が緑の茶畑となっており、車で 1 日走ってもまだ茶畑が続いている。山を登る途中に大きな紅茶工場がいくつもあり、紅茶の味は、標高の違いで異なるそうで、各工場で試飲させてくれる。美しい緑の茶畑では、何人もの女性が布の袋を背に、ひとつひとつ手で葉を摘んでいる。茶摘みの女性たち、紅茶工場で働く人々と経営者、そうした人の手を経て世界へと輸出される。美しい茶畑の山から、スリランカの経済を支えてきた紅茶の姿を垣間見た気がした。

ヌワラ・エリヤ地域は紅茶の産地

スリランカへの最初の入国はコロンボの空港。車に乗り換え、移動し周遊の旅を楽しんだが、最初の 2 日目、3 日目はアヌ　ラーダプラからたくさんの仏教の遺跡を訪れた。紀元前 5 世紀ごろからの古い歴史を持つ国でもある。なかでもシーギリヤロックは火道内のマグマが硬化した岩でできた楕円形の岩頸。その目立つ岩頸そのものの高さは約 200m ほどだが回りは平らで､直角に岩の壁が立ちはだかっている。周辺の庭園や水路を通り過ぎ、岩を切り開いた細い道や、設置されている階段で頂上まで登る。途中『シーギリヤ･レディ』と呼ばれる 5 世紀ころに描かれた美しい女性たちのフレスコ画もあり、自然の力強さ、美しい絵画、頼りない手すりのついた急な階段など、あっという間に岩上の王宮跡につく。周りは平らなので、見晴らしのよさは、いうまでもない。緑の森林がひろがっている。こんな場所に王宮を立てた歴史にも深いものがあるようだ。

シーギリヤロックを背に

山といえば、スリランカの隠れたパワースポット「ローズクォーツマウンテン」。山全体がローズクォーツ（ピンク色の水晶）で覆われた、世にも不思議な山なだが、酸性雨がピンクを薄い灰色の膜で覆ってしまった。表面を磨けばローズ

クォーツが出てくるそうだが、ここから運ばれた水晶は、あのインドの世界遺産・タージマハルでも見られるとか。

4日目、5日目もたくさんの仏教寺院を訪れた。お寺の中では、靴を脱ぎ、裸足にならなければならないのが、ちょっと面倒だったが、裸足になると足の裏が冷たくてちょっと気持ちがよい。また靴を履くときは、足の裏をきれいにしないと砂だらけで、やっぱり面倒。

イスルムニヤの涅槃像

食事は、カレーが多く、ナスやいんげんの野菜カレー、チキンカレーなどなど、バイキング式でいろいろ味わうことができ、味はおいしいのだが、1週間も食べているとちょっと違うものが食べたくなる。焼きそばみたいなものが出てきたときには、デリシャス。パンとコーヒーでランチした時も久しぶりでGood!

ホートンプレインズ国立公園やシンハラージャ森林保護区などスリランカの自然がそのまま残っている場所でのトレッキングも、動物たちの落とし物にどこからか出てきそうでぞくぞくしたり、靴に石鹸を塗りヒル除けをしながら歩いたり、雨風の中を歩いて進むだけの我慢の時間を過ごしたり、自然の中で咲く蘭など美しい花や森の中でカサカサ動く動物や鳥にカメラを向けたり、ワクワクがいっぱいだった。

泊まったホテルも場所によりさまざまで、何十年も前に日本の台所につけてあった湯沸かし器からお湯を出して使うシャワー、窓の隙間から虫が入り、食事から戻って歯磨きをしようと思ったら虫で真っ黒くなっていた洗面所、今まで泊まったこともないような素晴らしいスイートルーム。良かれ、悪しかれ、わぁっとびっくりしたり、感激したり。

空港への帰り道、最後に行ったマハー・ラジャ・ヴィハーラの寺院では、スリランカの人に交じり菩提樹に水を捧げ、寺院の中で読経する人々の敬虔な姿に自分の心も洗われたいという気持ちになった。

参加した9名のうち、アダムスピークの頂上に行けたのは3名であったが、スリランカのすばらしさは全員が味わい、満喫した10日間であったことは間違いない。

スリランカのオレンジペコの紅茶を飲みながら。

(総会の後に講演いただいた内容です。次号に掲載すると予告していたのですが、会報向けに改めて書いていただきました。写真も横関さん撮影です。ありがとうございました。荒井)

「南に遠ざかりて･･･」

夏原　寿一

冬場に東海道新幹線に乗るとき、私はいつも山側の席に坐る。それは、静岡付近から「雪白き山」を見るためである。「雪白き山」とは、言わずと知れた平家物語･海道記の一節「手越を過ぎて行けば、北に遠ざかりて雪白き山あり。問えば甲斐の白根といふ」からきている。その「雪白き山」を深田久弥は「…それは北岳ではなかった。もっと手前の赤石岳や悪沢岳…」と書いている。

さて、新幹線から「雪白き山」が見えるわけだから「雪白き山」から新幹線も見えるはずだ!?

そんなことを考えた。しかし、見えたとしてもその大きさは極めて小さく、例えてみればマッチ棒ぐらいに、ということになるだろう。そこで、マッチ棒をどのくらい離れたところから見ればその大きさになるのか、下記の条件で計算してみた。

赤石岳～新幹線・安部川橋梁の距離：　60km
新幹線の長さ：　400m（25m x 16両）
マッチ棒の長さ：　5cm

答は7．5mである。7．5mは、室内でいえば約４間の距離になる。マッチ棒を４間先に置いて見てみると意外に大きく見えるものだ。

ところで、新幹線車両の高さはおよそ4m。同様の計算をしてみると、それは0.5mmに相当する。身近にあるもので0.5mmというとシャーペンの芯の太さだ。それを４間先に置いて見えるのか？見えることは見えるが、その細さは見えなくはないという程度だ！

新幹線の白い車体に陽が射して輝いていれば見えるかも知れない…などと、その可能性を考えながら、「もう、赤石や悪沢に行くことはないだろうなぁ」、そんなことが頭をよぎった。

甲斐の白根…

田淵行男につながる細い縁

荒井　正人

私の父は長年俳句を嗜んできた。しかしその俳句がどれほどのものなのか知る由もなかった。６年前の秋に父は急逝したが、翌春、母から父の書棚を片付けてほしいと頼まれた。正直なところ父の部屋は煙草臭いのであまり入ったことがなかった。

書棚には句集を中心に、様々なジャンルの本が脈絡なく入っていた。押入れを改装した本棚で、奥行きがあり、本は三重に入っていた。それを引っ張り出し分類していくと、何と「黄色いテント」が出てきたではないか！なんで父の書棚に田淵行男の本があるのだろう。ケースから出してみると著者謹呈の短冊が挟まっている。すぐに母に聞いた。すると母はこともなげに、こう答えた。

「ああ、それはね、田淵さんの奥さんのひでさんが『濱』の同人だった関係だよ。ひでさんの句集もあるだろう？」（本名は「日出子」で「ひで子」は俳号である）

「濱」とは、父が属していた俳句結社で、主宰は大野林火である。父は会社の先輩に紹介されて「濱」に投句を始めたそうである。後に同人となっていた。

「じゃ、親父はその奥さんと会ったことがあるの？田淵さんとは？」

「さあねえ。あの人は何にも言わずに出かけちゃうからねえ。会ってるのかもしれないねえ。田淵さんご本人とは会ってないと思うけど。」

私は不思議な気持ちだった。父はひでさん（以降このように書かせていただきます）と同じ結社のお互いに同人であった。ならば面識があってもおかしくはないと想像した。父が田淵行男と直接会ったことはないにしても、ひでさんとは会っていて欲しい、そう思った。まさかの出来事であっ

たが、この時は田淵行男との繋がりが少しでも濃いことを願ったのだ。

一昨年近藤信行氏著「安曇野のナチュラリスト　田淵行男」が出版された。すぐに読んだところ、大野林火は度々安曇野を訪れていることを知った。改めてひでさんの句集を開いてみると「あとがき」に、「昭和２９年、（大野）先生が初めて牧村に行男をお訪ねくださいました思い出は私の一生の宝でございます。またそれがご縁となって同年の第一回「濱」鍛錬会の伊豆の戸田に参加出来ましたのも忘れられません。」とある。

私は父の残したものを調べ始めた。すると幸運なことに父の鍛錬会参加状況が書き留めてあるメモが残っていた。それを見てハッとした。第一回鍛錬会が昭和３０年に戸田であったと書いてある。翌年草津で第二回と続いている。ひでさんは昭和２９年と書かれているが、正しくは３０年が第一回なのかもしれない。いずれにしても、そこで父はひでさんに会っているはずだ！当時はまだ同人などというレベルではないが「雑詠」欄で名前を目にしていたひでさんと挨拶を交わさないはずがない。その後も絶対何度か会っているように思う。だが残念ながら、私の手元にある父の日記やわずかな手紙の類を見ても、父が安曇野にひでさんを訪ねたと確認できる証拠はない。従って田淵行男に会ったということも言い切れない。それでも、田淵行男とこうした細い繋がりがあったのだと思えることだけでなんとも言えない気持ちになれるのである。

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

7月例会　＜暑気払い＞

日　時:7月15日（土）　午後2時～　参加費:500円

場　所:集会室

講　演:島田稔会員による「高尾山のサポレン（サポート・レンジャー）」

※当日はミニ弁当と乾きものを用意いたしますが、お酒をはじめおもたせ大歓迎です。

※参加連絡は7月 11 日までに下記へご連絡ください。

連絡先:夏原寿一

9月例会:9月30日（土）～10月1日（日）

北杜市の日野春アルプ美術館で中村好至惠さんの個展が開かれるのに合わせ、絵画鑑賞のち、長沢洋会員経営の、一部新装なったロッジ山旅に宿泊し、翌日長沢さんに山行をご案内いただきます。ぜひ今から予定に入れておいてください。（参加連絡は、荒井まで携帯もしくはメールで＝連絡先は次ページ）

10月講演会:10月26日（木）午後6時

山本良子会員のお話

「数字の意味―JAC の先人の思いを通して、永年会員として JAC のこれからを考える」

・**5月山行**は雨のため中止となりました

＜会費納入のお願い＞

会報148号で新年度会費の納入方法を記載しております。未納の方は郵貯ほかの金融機関から、あるいは切手で納入願います。

なお、郵貯をはじめ金融機関からの振り込みの場合は明細書が出力されますので、これをもって領収書代わりとさせていただきますが、必要のある場合は、お申し出いただければ発行いたします。瀬戸会計係までお知らせください。

＜会員名簿の修正・追加などについて＞
下記の方々から連絡がありました。名簿の手入れをお願いいたします。また前号でご連絡しているように、「携帯番号」「(PC)メールアドレス」について積極的にお知らせいただきますよう、お願いいたします。
〇吉田理一
　携帯番号：
　PC アドレス：
〇中村好至惠
　FAX は自宅番号に同じ
　PC アドレス：
〇荒井正人
　携帯番号：　　PC アドレス：

＜画家・吉田博のこと＞
関塚さん執筆の「吉田博　一匹狼の山岳画家」と題した記事が『山岳 2017 年』に掲載されます。(7 月下旬発行予定)
その吉田博の作品展がタイミングよく、下記の通り開催されるのでお知らせします。(夏原)
　［生誕 140 年　吉田博展「山と水の風景」］
　　会場：東郷青児記念　損保ジャパン日本興亜美術館
　　(新宿　損保ジャパン日本興亜本社ビル　42 階)
　　会期：［前期］7 月 8 日～7 月 30 日　　［後期］8 月 1 日～8 月 27 日

＜催しの紹介＞
① 世田谷文学館、夏の企画展 「山へ！to the mountains！展」
(昨年の忘年会で、深田森太郎さんが概要を紹介された展覧会です。－会報 148、5～6 ページ参照)
改装のため休館していた世田谷文学館が4月末に開館し、7月15日(土)～9月18日(月・祝)には、標記企画展が開催されます。文学館のパンフレットには「人間は『山』と共に生きてきました。その過程で産み出されてきた様々な＜知＞と＜表現＞に注目し、文学を核としながら、芸術学、建築学、地質学、植物学などとの関係性の中で、『山』を学際的、多角的にとらえ直す初の試みとして開催します」とあります。日本山岳会も、資料映像委員会からシュラギント・ワイトを、図書委員会から書籍を貸し出して展示するなどの協力を行います。初日は暑気払いと重なりますが、午前中に一番乗りで観に行くのも良いかと思います。
ちなみに観覧料は800円。ただし7月21日は65歳以上無料。8月11日は無料観覧日。
② 日光自然博物館の企画展 「武田久吉展～日光の山々で躍動した若き日々～」
「数々の偉大な業績の原点となった少年時代の日光とのかかわりをひもときます」とパンフレットにあります。
7月9日(日)まで。問い合わせ:栃木県立日光自然博物館　電話:0288－55－0880

--- 編集後記 ----------
今号は予告・紹介などの多い会報となりましたがタイミングもありますのでお許しください。8月は例会がお休みの中での発行となります。会報への投稿も活動参加の一つと思います。ぜひ多くの皆様から投稿いただけますようをお待ちしています。葉書による近況でも結構です。
一昨日、日本山岳会総会が終わり、近藤雅幸さんの理事就任が承認されました。ご活躍を期待しています！
(荒井)

＜次号予告＞8月25日発行の主な内容
　暑気払いの報告、島田稔会員のお話の報告など